

日本の當用漢字と中國の常用字

さねとう・けいしゅう

一 比較は可能か

わがくにの當用漢字表は、一九四六年に決定公布されましたが、中國の常用字は一九五二年六月五日に公布されました。日本のは一八五〇字、中國のは一五〇〇字。

そのいみはちがいます。日本のは漢字制限のためのワクであつて、「これが漢字制限の最後の線ではなく、當用という文字の示すように、当座としての制限」ですから、将来はもっと減らしてゆくのが理想です。

中國のは、「それによって、文盲の初歩の識字教育をおしすすめ、同時にまた、それによって識字読本と通俗読物をつくる参考のために」撰定せられたもので、これだけおぼえておれば、たいていの読み物の95%をよみこなすことができる、といわれております。

日本の當用漢字は最大限度をしめすもので、中國の常用字は最少限度をしめすものですから、せいしつからいて、まったく反対です。ですからこの二つを、くらべてみるということは、はじめから話にならない、といえないことはありません。

しかしです、くらべてみることができます。それは、最大限と最少限ではあっても、これが、常用であり、使用度数の多い字である、ということは、まちがいないことです。(中国の常用字は、たくさんの本をしらべ、類度の多いものからとったのです。)つまり、これら使用度数の多い文字をみて、日本社会と中国社会をくらべてみることもできようというものです。

二 共通漢字と特用漢字

こくめいに、くらべてみた結果は、つぎのとおりになりました。

日本特用漢字	六四〇	日本当用漢字	一八五〇
共通漢字	一二一〇		
中国特用漢字	二九〇	中国常用字	一五〇〇

この「特有漢字」というのは、すこし語弊がありますから説明しておきます。これは「当用漢字」または「常用字」というワクのなかで比較したばあい、この国(たとえば日本)にだけあって、他の国(たとえば中国)にはないといういみです。ワクのそとでは、たいていの漢字が「共有」であることは、申すまでもありません。

それから、右の数字も、字形がちがえば、ちがう文字として、あつかうならば、特有漢字の数は、一五ふえるはずです。つぎの文字は、字形はちがっていても、おなじものとして共通漢字としました。

【日本】効卓嘆氷煙窓綿群舖閑隣飢鬪鷄顛

【中国】效桌歎冰烟窗棉羣鋪閑鄰饑鬥雞翻

さて、共通漢字一二一〇はつぎのとおりです。（部首順）

一丁七丈三上下不且世中主久乘乙九乾亂了事二互五井亡交享京人今介他付代令以件任伏休伯伸似但位低住何作使
來例供依便係俗保信修併倉個倍倒候借值假偉偏停健偶備傳傷像儉優元兄充先光克免兒入内全兩八公六共兵
具典再冒冬冷准凍凡出刀分切列初判別利到制刷刺刻則創前剛剽副創劇力功加劣助努効勇動務勝勞勢動勤包化北
匠匹區十千升午半卓協南印危却即厚原去参又及友反叔取受口古句叫召可史右司各合吉同名吐向否含吸吹告周味呼
命和品員唱商間啓善喜喪單嘆聲嚴四回因困固圍國園圓圖園土在地均埋城執基堂堅報場塊塗境增墨壁壘壞士壯夏
外多夜夢大天太夫央失奇奪獎奮女奴好如妥妨妹妻始姓委威娘娛婆婦嫁子孔字存季孫學守安完宗官定宜客宜室害
家容宿寄密富寒察實寧寫寬實寸封射將專尋對導小少就尺尾尿局居屋展層屬山岸島川州工左巧差已市布希帝師席帳
帶常帽幣干平年幸幹幾序底店府度座庭康廢廳延建式引弟弱張強彈形影往往征待律後徒得從復德心必志忘忙忠快念
怒思急性怪恐恥恨恩息悔悟悲情惜惡想愁意愛感態慌慘慢憤慰慶憂應懷成我戒戰戲尸房所扇手才打扶批承技投抗折
抱抵抽拒拒拔招拜拾持指振捕掃掌排掛掛探接推提揚握揮援損搖擺撲擁擊操擔據擡舉擴支收改攻放政故教救救敗敢散
敬敵數整文斗料斜斤新斷方族旗旣日早明易星春昨是時晚普景晴暑暖暗暫暴曉曲更晝替最會月有服望朝期木未末
本朱材村東板林果架某染柔杻柱校根格栽桃案桑條械森植業極榮概樂樓標模樣樹橋機橫檢槽次欺欺歌歡止正步武歲
歷歸死殘段殺母每毒比毛民氣水水永求汗江池決汽沒河油治沿沉泉法波注洋洗津活派流浪海消涉涼淚淡淨深混清淺
添滅港渴湖湯準溫滅滿演漠漸潔澤激濕濟瀾火災炭炭烈無焦然煮煙照煩熱熱燈燒營爐爭爲父片牛物牲特犯狀狂猛獨
獲獸獻率玉王珠班現球理環甘生產用田由甲男界留畜畝略畷異當疑疫疫病痛登發白百的皮盆盆盛盜盡監盤目直相省
看眞眼睡知短石砲破研硬碎確磁示社祖祝神稟稟禍福禮務私秋科租移稅程種稱稻稿穀積究空突窓窮立並章童競竹笑

(1) 重複

日本の当用漢字は、はたして、これだけ必要なのでしょうか？ ムダや重複はないのでしょうか？ よくみてみましょう。

中国では、「刀」だけなのに、日本には「刀」のほか「劍」があります。「刀」と「劍」では、もとは形がちがったのですが、さればといって、はたして二つもいるのでしょうか？ これをツルギとよむときは、カナでけっこう。ただ「劍道」のときにだけいるかもしれませんが、一九四六年、当用漢字を制定したときには、劍道はほとんど絶えていたはず、これをのこしたことは、先見の明をほこってもよいのかもしれませんが。なお、ちょっと、ここに書きそえておきますが、軍隊または武器にかんするものも、日本のほうは、はるかに多いことです。すなわち、「劍」のほか「帥」「弓」「矛」「盾」「矢」「艇」「艦」などが、日本にはよけいにあります。

死んだ人のしるしにするハカについても、日本では「墳」と「墓」と二字とてあります。「墳」の字などは、「墳墓」「古墳」ぐらいしか用途がないとおもいます。「墳墓」は「墓」、「古墳」は「ふるい墓」で充分ではありますまいか？ 中国では一五〇〇字のなかには、どちらも入っております。ハカのことは、「墳」の略字「坎」をつかいます。ハカにちなんでもいいば、「仏」「僧」「尼」「寺」「塔」「禪」「棺」なども、中国の常用字には、はいっております。建設のためにいそがしい中国では、そんなことには関心がうすいかもしれません。

オチルといういみの字では、共通字として「落」があるのに、日本では「墮」と「墜」あわせて三種あります。「墮」は「墮落」以外には、つかいみちが考えだせません。ただ、それだけのために一字とておくよりは、「身をもちくずす」ということばをつかった方がいいのではないのでしょうか？「墜」にしたところで、「墜落」「失墜」

ぐらいしか、つかいみちがなさそうですが、なにもツイラクといわずとも、オチルでけっこうではないでしょうか？「飛行機がツイラクした」といわなくとも、「飛行機がおちた」でよくわかります。「失墜」だって、「おとす」といったほうが、よくわかるくらいです。この二つをのこしたことなどは、漢語はえらそうだ、という日本人の心理をよくあらわしているとおもいます。

「少」のほかに「寡」をのこしたことも、それとおなじ気もちとおもいます。「寡少」などといわなくとも、「すくない」でよろしく、「寡婦」といわなくとも「やもめ」といえばよいでしょう。

「喜」のほかに「悦」がありますが、なにも「悦服」「満悦」などといわなくともよろしいとおもいます。

「分」のほかに「頒」のあるのも、「頒布」「頒行」などという役人ことばがすきなためです。

「棄」のほかに「捨」、「写」のほかに「撮」、「選」のほかに「擇」、「病」のほかに「疾」、「得」のほかに「獲」や「穫」、「鏡」のほかに「鑑」のあることなど、みな、しかつめらしい漢語をつかわせるために、のこしたものとおもわれます。これらはみな、訓でよんではいけないことになっているのをみても、その用途がうかがわれるではありませんか？

(2) 同一文字

もっと、どうかとおもわれることがあります。それは、おなじ字を二つのこしてあることです。

当用漢字では、「聯」を「連」にし、「輯」を「集」にするというように、字のものとちがっていても、音がおなじく、いみがちかいものを通用させているのはけっこうです。ところが字のものと、音も、いみも同じく、ただ形がちよっとちがうだけで、二つものをこしておるのは、あまりに不見識なことではないでしょうか？

その一組は、「棋」と「碁」です。中国の字びきをみますと、「棋」は「もとは碁とかき、また碁ともかく」とあり、まったく同じ字です。ところが、日本では、ショウギには「棋」をつかい、ゴには「碁」をつかうために、二つのこしたのです。(中国常用字には二字ともありません。) 当用漢字をきめたとき、どちらか一つにして、「棋」をうつ」というように使わせればよかったのでした。

それとおなじものが、「個」と「箇」です。しかも、日本では、「個」はコとよみ、「箇」はカとよませることにきめてあるのです。これまで、そうであったにしても、当用漢字をきめたとき、「個」ひとつにして、よかったのではないか? 「五箇月」など、いまではもう、あまりつかう人もなく、「五ヶ月」から「五カ月」になっている、いまに「五か月」でよくなるのではないでしょうか?

「練」と「錬」なども、どちらか一方をのこせばよかったのではないのでしょうか? 中国人は「紀念」でも「記念」でも、平気、「日誌」でも「日志」でも平気です。文字をつくった国の人は、自由につかいこなし、文字をもらった国の人は、後生大事とはじめのまを、まもりつずけるのが、運命かもしれませんね。漢字をはつめいした中国人は、「一定の条件のもとで」音表文字にとりかえようとしています。つくったひとは、こわす権利もあるわけです。

(3) 意外なことども

日本の当用漢字にある「恋」の字が、中国の常用字にはみつかりません。では、現代中国人は恋をしないのでしょうか? まさか! あたらしい小説には、あたらしい恋ものがたりがあります。でも、たいていのばあい、「恋人」といわず、「愛人^{アイレン}」といっています。「恋する」というかわりに、「愛^{アイ}」という一字の動詞をつかいます。お

もうに、日本語のレンアイということばは、明治の小説あたりで、loveを「恋」とやくさず、「恋愛」という、かたいことばに訳したのに、はじまるのではないでしようか？「恋いをしている」という民俗形式を「レンアイしている」という外国形式にあらためたのは、やはり漢語すうはいの結果であらうとおもいます。

また意外なのは「哲学」の「哲」の字も、中国の常用字にはありません。では、中国には哲学というものがないのでしようか？とんでもない、むかしは孔子や老子そのほかの哲学があったし、いまは毛沢東の「実践論」だの「矛盾論」などという、わかりやすい哲学があります。また、かつては、胡適の「中国哲学史大綱上巻」とか馮友蘭の「中国哲学史」などがありました。ただ、カントの哲学書だの、ヘーゲルの哲学書などは、さして訳されたことはありませんでした。でも、カントの哲学（康德的哲学）とか、ヘーゲルの哲学（黒格爾的哲学）ということはいわれておりました。それなのにいま、「哲学」の「哲」の字が常用されてないのは、なぜでしようか？それは、わざわざ「哲学」といわずに「思想」という、やさしいことばでいうばあいが多いからでしよう。たとえば、「毛沢東哲学」といってもよいところを「毛沢東思想」といいます。これも、ことばの民主化といえるかとおもいます。もっとおどろくのは、日本では儒教の国とおもっている中国の常用字に、「聖人」の「聖」がなく、儒教の根本道徳となっている「仁」がなく、おなじく儒教にはじまる「五倫」の「倫」がなく、いや、それどころか、「儒教」の「儒」の字までもない、ということです。これに反し、日本には、それらの字はもちろん、そのほか、儒教的のものは、のこらず保存してあるようです。

なお、民主的になった中国では、常用字にみられず、日本の当用漢字にあるものには、「朕」「陞」「陵」「勅」「詔」「諮」「諭」「璽」「妃」「賜」「赦」「謁」「奏」「殉」「臣」などあります。「臣」がなくて

は、「大臣」ということばにこまるだろうとおもう人があるかもしれませんが、中国では、人民政府のできるまえから、大臣にあたる人は、「主席」だの、「部長」だのといっているから、いっこう、さしつかえはありません。

四 中国の特有漢字

中国の常用字は、日本の当用漢字よりも三五〇すくないのですから、すべて日本の当用漢字とおなじかという、と、どっこい、そうはいかない、一五〇〇のうち二九〇、およそ二割は、日本の当用漢字にない文字です。これによって、日本語と中国語、日本社会と中国社会のちがいが見られるというものです。

(1) 日本では、いない字

日本の当用漢字では、その選定の方針として、代名詞・副詞・接続詞・感動詞・助動詞・助詞は、なるべくカナ書きにするという方針をたてています。それがため、当用漢字では、つぎのものがはぶかれています。中国では、カナがなく、これらは文法的要素として(虚字)、必要この上もないものです。それは、

已也之只而此於其或些忽尙甚竟須會斯稍僅齊蓋雖離恰莫

(2) つかいかたの日本とちがう字

日本にも当用字以外になら、ないではないが、用法がちがっているものをあげると、つぎのとおりです。

牙Ⅱキバでなく、歯

吃Ⅱドモルでなく、食べる

把Ⅱモツといういみのほかに、「……をば」とつかう前置詞

那 || それ (これの反対)

穿 || ウガツでなく、着る

拿 || モツということから、「……で」

這 || ハウでなく、これ (その反対)

猪 (猪) || イノシシでなく、豚

喝 || シカルでなく、飲む

槍 || ヤリでなく、銃

鞋 || わらじのジでなく、靴

嘴 || クチバシでなく、口

鴨 || カモでなく、アヒル

賽 || 賽銭の賽でなく、キソウ (賽馬 || 競馬)

牆 || カキでなく、壁

なお、つづくわえておきますが、おなじいみには同じいみですが、日本ではあまりつかわないうで、中国で常用字になっているのは、つぎのものです。

肚 (腹) 狗 (犬) 坡 (坂) 孩 (子) 哭 (泣) 蛋 (卵) 畢 (卒) 甜 (甘) 歇 (止) 醋 (酢)

(3) 日本では見かけない字

つぎの字は、一流のA印刷所とB印刷所に、そなえてない字ですが、中国では、常用字になっています。

日本の当用漢字と中国の常用字

(a) A印刷所・B印刷所、ともにない字

(字)

(い)

み)

伙 道具といういみの「傢伙」につかいます

搞 ものとを「する」(これは最近つかわれるようになった字で、字書にもありません)

瞧 見る

碰 ぶつかる

懂 さとる、わかる

垮 よく「打垮」とつかわれ、くずれる意味

(b) B印刷所のない字

(字)

(い)

み)

丟 すてる、なくする

掉 おとす

(c) A印刷所のない字

(字)

(い)

み)

耍 なぐさむ

讎 きたない

吵 シャべる

瞎 めくら

褲 ずぼん

咱 じぶん

啦 「……だ」といういみの助詞

B印刷所やA印刷所は、日本一の大印刷所ですから、このくらいですむのですが、ふつうの印刷所には、たいてい、つぎの中国常用字がありません。

(字) (い み)

你 あなた

她 かの女

它 それ

們 ら、たち(人間の複数)

怎 どうして

麼 「……か?」または「甚麼」(なに) 「怎麼」(どうして) 「這麼」(こんな) 「那麼」(あんな) のように、用途の多い字です。

很 たいへん

媽 母

嗎 ……か?

呀 ……か? ……よ!

日本の当用漢字と中国の常用字

(字) (い) (み)

吧 ……だろ。……なさい!

呢 ……ね! ……か?

啊 ……よ! ……か?

抓 つかむ

挖 掘る

跟 ……と

跑 はしる(「走」は、あるく)

够 足りる。また「能够」とつかうと、「できる」

これらの字は、中国では、使用度数のいちばん多いものですから、中国語をおしえるときには、よく説明する必要があります。

こんごは、中国のものを印刷する機会が多くなることとおもいます。印刷所では、ぜひ、これらの文字を、全部そろえておいてもらいたいとおもいます。

(4) 常用字にあらわれた現中国社会

(三) 「日本の特有漢字」の(3) 「意外なことども」のところを裏がえしにしてみれば、中国の現在と日本の現在とのちがいがわかるといえます。たとえば、儒教のことなどがそれです。そのほか、気のついたことを書きそえますと、日本には、「宴」とか「棋」とか「碁」とかアソビに関する字があるのに、中国には、ありません。

ん。たぶん、建設にいいがしい中国としては、いま、そんなものを、あまり問題にしないのだろうとおもいます。「仙」という古めかしい字のつかわれるのは「神仙」(かみさま)ということばがつかわれているため、「秧」の字のあるのは、「秧歌」という民間演藝がさかんにおこなわれているため、「牀」という字のあるのは、日本とちがつて「寢台」にねる生活だからです。動物で「鼠」「蛙」「蝸」「蛇」「虎」のあるのは、これらに弱らされているためでしょう。しかし、いまに、退治してしまつて、常用字としては、いらなくなる時もあることでしょう。(一九五三・五・一一)